




学位論文審査結果報告書

報告番号	北里大 甲 第 1302 号	氏 名	土 井 真 喜
論文審査担当者	<div> <div>(主査) 教授 尾鳥 勝也</div> <div>(副査) 教授 岡田 信彦</div> <div>(副査) 教授 吉山 友二</div> <div>(副査) 准教授 平山 武司</div> </div> <div>    </div>		
<p>〔論文題目〕</p> <p>Establishment of an opioid injection supply system to address demands during non-standard working hours (在宅緩和ケアとオピオイド注射薬に関する夜間・休日の医療連携モデルの検討)</p> <p>〔論文審査結果の要旨〕</p> <p>近年、訪問診療に対応する医療機関は増加傾向で、在宅の終末期医療や看取り件数が増加している。がん診療において、在宅療養や緩和ケアの必要性が高まっている中、緩和ケアの対象患者は非がん患者にも拡大しており、在宅療養患者の緩和ケアに対する薬局薬剤師の介入意義は大きい。緩和ケアにおいてオピオイドの使用頻度は高く、病態変化に伴い、早急にオピオイド投与経路を余儀なく変更される事例があるが、夜間・休日にオピオイド注射薬の対応が可能な保険薬局はわずかであり、保険薬局の情報開示の乏しさゆえ、医師が連携薬局を探すことが困難な現状にある。そのような状況下、在宅療養中の患者に適切な緩和薬物療法を提供する地域の医療連携体制の整備は喫緊の課題であるため、土井氏は、特に夜間・休日のオピオイド注射薬投与に着目した医療連携モデルの構築を行った。また、がん患者の全人的な苦痛に対するケアにおいて、代替療法としてリナロール含有精油を用いた症状緩和ケアが行われているが、精油による皮膚感作が問題視されており、繰り返し皮膚に塗布する際には注意が必要である。そこで、リナロール含有精油の安全性（皮膚感作性）についても検討した。</p> <p>本研究では、まずオピオイド注射薬の処方・調剤の現状や、訪問診療地域、夜間・休日対応の課題について、札幌市近郊の在宅療養支援診療所（以下、診療所）の医師と在宅患者調剤加算の算定実績のある保険薬局の薬剤師を対象とした無記名記述式調査を実施した。その結果、調査対象の全地域で緩和ケアが提供可能な状況であったが、極少数の担い手で支えられている現状が示され、休日対応や緊急対応に困るという回答が多く、対象地域での医療連</p>			

携体制の整備の必要性が明らかとなった。また、保険薬局でのオピオイド注射薬の夜間・休日対応の課題を明らかにし、その改善に有効な方策を探るために、札幌市内の無菌調剤設備を有する保険薬局に勤務する薬剤師5名を対象に、半構造的面接を行い、**Modified Grounded Theory Approach (M-GTA)**を用いて分析した。その結果、夜間・休日のオピオイド注射薬供給に関する複数の課題が相互に作用していることが明らかとなり、薬剤師は<理想の薬剤師介入>を描きつつも、〔夜間・休日の対応における不安〕を抱え、〔マンパワーの限界認識〕により、さらに課題が複雑化し、〔情報不足による弊害の認識〕を起こす。これらの克服に向け<多職種との相互理解の獲得欲求>を抱くが、その獲得にも、〔マンパワーの限界認識〕は拭えず、困難感が増幅していく過程が示され、これらの課題解決を意識した対策が必要と考えた。そこで、オピオイド注射薬に関する夜間・休日の医療連携モデルの構築を考え、診療所医師3名と無菌調剤設備を有する保険薬局に勤務する薬剤師6名で連携チームを結成し、明確なテーマに焦点を絞った議論（フォーカス・グループ・ディスカッション：FGD）を行い、様々な事象の関係性を見出す質的分析法である **Steps for Coding and Theorization (SCAT)** 分析を行い、その運用ルールを策定した。その策定した運用ルールに基づいて、2016年10月3日～2017年6月30日（約9か月間）の期間で、夜間・休日のオピオイド注射薬に関する医療連携モデルを運用した結果、運用前に比べ、報酬に関する項目以外において困難感が緩和され、連携度はすべて改善傾向を示した。薬剤師個人での解決は困難な状況であるが、医療連携体制の構築により解決できる可能性が示され、さらに、連携チームの双方向性の連携ミーティングが医師に行動変容を起こし、平日対応が強化されたことで、緊急症例の出現を一部回避できたと考察している。

次に、緩和ケアによく使用されるリナロール含有精油について、**human Cell Line Activation Test (h-CLAT)**法により、3種の精油（ベルガモット精油、ホーリーフ精油、タイム・リナロール精油）の皮膚感作性の有無を検討した。その結果、すべての精油で皮膚感作性は陽性と判断されたことから、リナロール含有精油を皮膚に反復塗布する際には、皮膚感作性を考慮した指導が必要であると考察している。

今回の研究において、土井氏は、在宅医療の進展を阻む大きな要因である夜間・休日の課題に対応し、各職種の負担を軽減できる医療連携モデルを構築し、その有用性を明らかにした。また、精油によるケアは、皮膚刺激性や皮膚感作性を考慮しながら用いることで、在宅療養時の症状緩和ケア対策の一つとして活用できる可能性を示した。

本研究成果は、疾患や使用する薬剤、職種にかかわらず応用可能な連携モデルとして、今後の医療・介護において実行可能性が高く、最後まで患者・家族の望む場所での療養継続しうる在宅緩和ケアの推進に寄与できるものであり、土井氏による本研究は、博士（医療薬学）の学位に十分値するものと判断し、学位審査を合格と判定した。

以上